

時 言

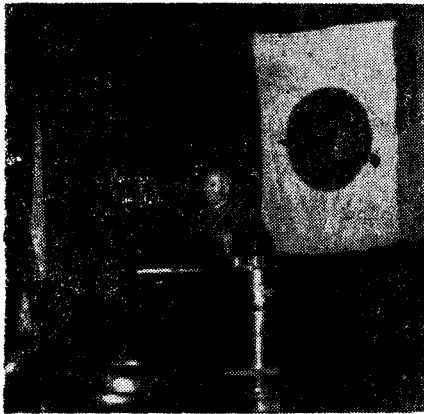
滿洲土木學會の創立に際し

参議 工學博士 直木倫太郎

(本文は去る9月28日新京日滿軍人會館に於て開催された滿洲土木學會發會式の際名譽委員直木倫太郎氏に依つてなされた講演である)

滿洲土木學會が今日茲に創立を見ましたことは洵に御同慶に堪へませぬ。

これ一に在滿土木技術家が最近如何に増加しつゝあるか、即ち我滿洲の土木事業が昨今如何に多方面への活躍を敢てしつゝあるかを物語るものであります



が然かも其の間熱心なる有志諸君の御盡力により、日本の土木學會を動かし、緊密不可分の關係に於てその積極的の支援を得るに成功し斯くて我滿洲の土木界に一元的な研究機關を創設し得たのであり、その多大の御努力に對し深く感謝せざるを得ませぬ。

さて茲に何よりも先つ我々は我等の目前に時々刻々に展開して止まざる世界的空前の大轉換期の、その眼まぐるしき諸々の大動亂に直面し且つ具さにこれを味ふに於て、御互が能くぞ斯くも又と得難き最も生甲斐ある時代に生れ合せたことか、わけても我日滿兩國の豪快極まる大飛躍大進展の眞直中に生れて、具さに之れを呼吸し之れに感鳴し得ることの、その限りなき幸福こそは只々隨喜感激の外ありませんまひ。

わけても茲に此の時代を特に最も深く感激し最も生甲斐を覺ゆるものは、實に我等技術家であります。私は學校生活を終へてからの過去四十年の技術生活に於て、今日見るか如き斯かる技術への社會的

尊重を未だ曾て呼吸したることはない、否寧ろ技術家たることの不平不満に常に悶へ難みつゝこれを諦むるより外なかつたのであります。然かも圖らずも茲に世界狀勢の歴史的轉換と共に突如として、科學尊重、技術重用への一大變轉を國家的に將た全面的に理解し認識せしむるに

至つたことこそ、之れをしも何と喜はざるを得ませう、それは我々技術家としては實に痛快至極のことである。が、それもその筈である、今や世界を舉げての國家總力戰、高度國防國家體制の完遂への最中である。國民の誰もが各自の立場に於て國家奉仕の爲に懸命の努力を捧ぐるは固より、わけても東亞建設の聖業の爲には、そこに科學と技術の躍進こそはその重大要素たるのであり。最近日本政府發表の基本國策なり又其の立案中の諸政策の上にも歴々としてその意味が示され、民間も亦能くこれと呼應していきみ立ちつつあるのであります。即ち斯くして我國の科學が、技術が始めて社會の活舞台の上に輝やかな「フットライト」を浴ひて、天晴れ時代の立役者として立振舞ふに至つたのであります。私共は以前から常に斯くあるべきの當然さを飽迄主張し確信しつゝも、今日まで遂に其の機を捉へ得ざりしのみか寧ろ不平と煩悶に終始したのであつた。

そは何が故に然りしかを一應振返つて見まするに

昔は社會生活上必要の器材即ち「物」が洵に少くて済み且つその取扱ひ方も頗る簡單であつた。水の流るゝを見ては「逝く者は斯くの如きか晝夜を捨てず」と只嗟歎するのみで足りた、誰かこれから水力電氣を採るなどの必要を感じようぞ。「桃李もの言はず蹊自ら道を成す」のであつて、そこに自動車もなければ舗装の必要もない。木は材木として使へばよいのでパルプを取るなどの必要もなく、石炭は燃料として掘出せば足るので、人造石油の工夫に想到する必要がない。さればこそ「物」を相手の學問こそは全く尊ばれず。唯「人」を相手の學問、「人」と「人」との交渉の學問、人間同志の「社會現象」の研究が最も重んぜらるゝ半面に於て、「物」では全くものが言へなかつたのである、「物」の研究に興味を持つ者はこれがホントの「物好き」なのであつた、尊敬どころか寧ろ外道扱ひ、狂人扱ひであつた、その氣持が一般的に滲み込んだるまゝ今日にまで持續けられ來つたのである。

茲に無駄言を挿むやうで相濟まぬが、その面白い例は彼の風來山人平賀源内にある。今から百五十年前、元祿から天明へかけての徳川文化の最中に於て、彼は摩擦電氣の器械を工夫し、暗闇に火花を散らせたり、碁盤の上の人を戰慄させたりしたのみならず、その當時に於て彼は武藏秩父の郷に石綿を發見し、火に燃えさる布を織り上げて釜敷として賣り出したり、江戸の湯島に物産會とて今の展覽會を開催すること五回、その出品二千種、出品者三十ヶ國に及ぶのみか、その優秀品目を圖解し説明して一書に編述したり、又は砂糖の栽培法を著述し、且つ大阪の豪商中島屋喜四郎に説き備後の地味頗るこれに適するを以て栽培を實行せしめて巨利を博せしめたり、又九州天草島の土質に着眼し幕府に建白して外國向け輸出陶器を製作、長崎表にて外國人相手にこ

れを賣出さんとしたり、或は甲斐の金山を調査し、或は仙臺侯の依頼で仙臺藩内の鐵山を調査したり、又は當時もてはやされし源内櫛、自惚鏡を賣出した、金唐革、紅革の工夫を遂げ又は藥草藥物の研究に従ひ、その最後には伊豆、相模の島々の開發を建白するなど。凡そ斯くの如きは今日ならはに立派な技術家とも見るべきものが、世間からは「手品師、大山師の親方」と嘲けられ、その遺瀟なき悲憤は彼をして「放屁論」其他幾多の隨筆に於てその鬱憤を爆發させたものゝ、却てその歿後までも、「誠の學問の邪魔を爲せし當代俗學の元祖」とか「實に才子の警めならん」とまで「鳩溪實記」に書立てらるゝ始末。これでは何うして技術が伸びる餘地があらうか。

次て明治時代に入つては、これは皆様よく御存じの通りで敢て多言を要せぬが、極最近までは所謂自由經濟の時代、營利本位の嵐に吹捲くられて居たので、技術上必要な總ての機械も製品もパテントも、そして廉いもの新しいものが、次から次へと自由に世界の何處からでも手に入るからには、其の間何處に我等技術家の獨創の見地を發揮し、實地に之れを具現し進展せしむる術があらう、まして研究費實驗費の如きまだるき工作に誰あつてか耳を貸さう。國家も、大會社も、まして箇人の誰が何程の力を入れやう。

斯くて技術は何時までも外國の技術に追隨するの外なく、單に民間企業の利益の爲の手段として道具として屈從するの外なかつたと同時に、我土木技術の如く専ら國家の公益事業の爲に終始する處の専門部門とて、亦自ら夫等一般技術界の捲添へを喰つて、恰も國家行政上の手足としてのみ役立つものゝ如くに見做され、爲に極めて不快な、地味な、陰鬱な立場に隱忍するの外なかつたのである。

然かも此の間、我等が先輩の努力と働きこそは實

に大きい、斯かる氣まづき不快極まる時代の流れに忍従しつつも、黙々として只管その志す處の道に一意専念、努力の限りを盡し來つたのである。今日我々が斯くも目前素晴しくも目覺ましき大舞台に直面して、即座にこの新時代の要求に即應して起ち得るだけの覺悟と用意を自信し能ふ所以のものは、全く我先輩の尊き努力の賜物である。

技術は常に大きな一つの繋がりである。先輩の努力なくして我等の働きは無く、我等の苦心なくしては又將來の技術は活きぬのである。

而してこの大きな繋がりを作る所のものが日本の土木學會である。これこそ我等が専門の學術的研究の中心機關である。その研究は常に新しく、常に深く、駸々として押進められつゞのある、而已ならず我が諸先輩の業績の大半も亦常に此の機關によりて尊く記録されてあるのである。之等研究の経路を尋ね且つその不斷の新鮮味に觸るゝことなくしては我等が今後志す處の大陸での大活動の舞臺に於て不斷の澁刺たる生氣を點することは出來ないのである。即ち斯かる一元的な學術研究機關を専門上の一大據點とすることによつてのみ、我等は飽迄時代の要求を背負ふて邁進し能ふのである。

綜合技術の必要が最近大に説かれつつあるが、然

かもその綜合的活動の上に多くの權威を持ち、多くを主張し、多くを行動し、且つ多くを貢獻せんが爲には、先づ飽迄も自己の専門に忠實であらねばならない、飽迄も専門的據點に立ちて然る上にこそ更に時代の要求たる綜合技術の妙用に參畫せねばならぬのである。外には飽迄高度國防の線に沿ひ、内には飽迄滅私奉公の線に沿ひ、飽迄雄々しく「我等の時代」を進展せしめねばならぬのである。過去のあの陰慘極まる舞臺裏で、大道具小道具を持運び、何時も他の人々の爲に都合よき舞臺拵へを爲すために、したたか熱汗を搾つたあの隠れたる努力、認められざる苦心に代へて、今や我から進んで花やかな舞臺の正面に、立派に「時代の主役」を勤め上げねばならぬのである。

然かも思へ。技術が主役を勤むる時代は最近決して一時的ではなく、一幕ぎりではないのである。それは今日を契機として、永遠に愈々益々有力に活潑に進展して、止まざるの必然であり、且つ國家の爲に是非共然かあらしめねばならぬのである。

益々廣まる東亞の大陸を踏まへ、愈々勇ましき東亞の大建設を前にし、旺盛なる「土木報國」の信念に生き抜かんことは、蓋しこれからのなのであると強く主張したいのである。

皇紀二千六百年慶祝のうた

直木倫太郎

- ◎海越えてひろがる陸を踏める身ぞいや身にしめて壽詞まをさめ
- ◎ひんがしゆ神代ながらの光射しむら肝とほす今日のよき日ぞ
- ◎肇國の御詔かしてし宇の下大陸に立つ吾をば矜らむ
- ◎防人かあらず御旗にさきがけていまぞ振さむあじあのあじあ
- ◎日の神の大御威を背に負へれ御影のままにひたにい往かむ
- ◎正しきを性としたまふ大御魂弘べ恢めまく心つつしみ
- ◎神つ代ゆいだき磨ける和魂の光ぞ四方に直に射さしめ